中年期女性の夫婦関係に関する研究

—実存分析的視点から—

An Investigation of Marital Relationship in the Middle-Aged Women
−from the Viewpoint of Existential Analysis−

松久　文子[1)]
緒賀郷志（岐阜大学教育学部）
MATSUHISA Fumiko
OGA Satoshi

要約

本研究では，空の巣症候群など喪失体験が多く心の問題を抱えやすいと言われている中年期女性の夫婦関係の質を行動，愛情，態度の 3 側面から測定する「夫婦関係における実存的充実尺度」を作成した。次に，作成した尺度を用い夫婦関係における実存的充実と関連する要因についての検討を行った。

夫婦関係における実存的充実尺度は，第1因子「創造価値（かかわり行動）」，第 2 因子「体験価値（愛によって得られる感動および感覚）」，第 3 因子「態度価値（受容的態度）」で構成された。

夫婦関係における実存的充実と関連する要因については，経済的安定が実存的充実の基盤となっている可能性が示唆された。さらに，経済的に安定していないと精神的健康ではない傾向があることから，妻の実存的充実や精神的健康にとって経済的安定が非常に重要な要因であることが確認された。子どもとの関連では，子どもの有無・年齢と夫婦関係における妻の実存的充実は直接的には関連がないことが示唆された。

妻の夫婦関係における実存的充実と精神的健康との関連においては，夫婦関係における愛によって得られる感動と受容的態度が精神的健康にポジィティブな影響を与え，特に愛情に関するポジティブな感情が，妻の精神的健康にとって重要であることが明らかとなった。

キー・ワード：夫婦関係，中年期女性，実存的充実

問題と目的

現代の夫婦中心の家族は，今，物質的にはともかく精神的には危機的な状況に直面しているといわれている。離婚に関する統計 (厚生労働省，2006）によると，離婚件数は1950年から1998年までの48年間で全体としてはほぼ3倍の増加となっているが，同居年数20年以上の夫婦の離婚は5倍近くに増加している。また，厚生白書平成10年版（厚生労働省，1998）の報告によると，離婚申立ては約7割が女性からのものであるとしている。2003年実施の「家族についての全国調査（全国家族調査委員会，2005)」における夫婦関係全体に対する満足度について見てみると，満足度は妻の方が夫より低く，妻の結婚当初の高い満足度が中年期に有意に低下し，年齢を重ねても満足度は回復しないという調査結果が報告されている。

また，岡本 (1985)は，中年期の女性は，身体的変化（体力の衰え，時間的展望の狭まり，生産性における限界感の認識など)，家族サイクル的変化（子どもの自立，自身の親の死など)，心理的変化（空の巣症候群，夫婦関係の再構築，安定感の増大など）といった否定的及び肯定的変化を感じはじめると述べている。さらに，一丸（1990）は，中年期には種々の不適応，心身症，心理的障害が生じやすいことを報告している。子どもの自立期を迎えた母親（妻）は，母親の役割から概ね解放されると同時に，妻として自分はいったい何だったのかという意識と夫婦関係の再確認の欲求が高まってくるのであろう。加えて，体力の衰え，能力の限界，更年期と言われる体調の変化など，自己の有限性を自覚しそれを受け容れるという新たな課題も出現すると考えられる。

これらのことから，同居年数20年以上のいわゆる中高年夫婦において，特に中年期女性がなんらかの内的な問題意識を抱えている可能性が高いことが考えられる。

さて，夫婦関係に関する心理学的研究はこれまでアメリカを中心に活発に展開されてきているものの，日本においては，まだ研究の蓄積が乏しい。

エリクソン（1959/1973）は，ライフサイクル論において，成人期の発達における主要な危機は,「親密性（intimacy）」対「孤立（isolation）」であるとし，成人期では，他者との親密な関係“他者との本ものの「かかわりあい」”をもつことが大きな課題であり，その課題が獲得されないと，恋愛や結婚にいたることは難しいと述べている。そして，親密性を“他者と体験を共有したり，相違を出し合って互いに調整したりしながら，提携して具体的な問題に対処し，実際の生活を営んでいくこと”としている。このことから，親密性は結婚生活においては「家事や世話など家族や夫婦関係全般についての取り組みや夫婦間でのかかわりおよび心理的なサポートなど」によって具現化されていると考えられるであろう。しかしながら，それら具現化された親密性は，年齢にかかわらず，夫が妻より低いこと（全国家族調査委員会，2005；柏木・平山,2003；伊藤,2000）が報告されている。また，佐藤（1999）は，キーファー（Kieffer,C.）が親密性を「自己と他者を身体的，認知的，情緒的なかかわりの中で経験すること」と定義したものを用いて，夫婦療法の観点から“親密性はそれぞれの生育歴・生活歴をひきずっており，何をもって親密であるとするかは夫婦間ですら共通認識事項とするのは難しい”と述べている。これらのことから，このような具体的顕在的な側面のみで夫婦間における親密性を評価できるかは疑問の余地があるといえる。

親密性とは異なった視点で，Adams & Jones（1997）は，Commitment to spouse（配偶者への愛情をベースに，配偶者や配偶者との関係に専心しており，結婚における満足のために結婚を維持しようとしていること）が，結婚における目標を持ち，配偶者を愛して，幸福を増進し，結婚の質を高めていることを明らかにした。さらに，Johnson（1991）とSwensen & Trahaug（1985）は，結婚に対するCommitmentについて，結婚当初の恋愛感情に基づいたCommitmentは，結婚生活を共に進めるに従い社会からの圧力を受け，人格的なものが減少し組織的なものが増加していくと考察している。

わが国では，宇都宮（2005）が，夫と妻がともに幸福感の高い結婚生活を持続するには，かけがえのない相手として人格的にCommitmentすることの価値を認識しつづけることが重要であると指摘した。加えて，現在の状態だけでなく夫婦の歴史的背景にも着目し，たとえ結婚満足感の低下が見られても，それは一つの発達の経路に過ぎないことが考えられ，重要なことは夫婦二人のあり方について積極的にCommitmentし続ける姿勢であるとした。

さらに岡堂（2000）は，家族心理学の立場から“すべての家族成員には適応と変化を求める新しい課題があり，それは家族にとって危機となることがある。家族はこの課題に取り組みながら，安定した状態に達することが可能になる。”としている。長い結婚生活の中で，夫婦関係や家族の変化を受け容れ，結婚や配偶者にCommitmentし続けることが，結婚の継続や結婚の質において重要であると考えられる。

以上みてきた結婚に対するCommitmentとは，夫婦関係における夫および妻の精神的内在的側面である。夫婦関係においては，外在的側面である家族の日々の暮らしを支える夫婦あるいは夫や妻としての具体的活動があり，それに対しての喜怒哀楽を伴った充実感がある。それらは，日々の何気ない事柄ではあるが，それが結婚生活の多くの部分であり，夫婦生活にとってきわめて重要な部分であると考えられる。また，菅原・琢磨（1997）は，夫婦関係における愛情に関して，“愛ある結婚が，個人の結婚生活に対する幸福感につながる”と述べているように，夫婦関係において，愛情にかかわることは重要であると考えられる。さらに，夫婦関係や配偶者を受け容れていこうとする態度も重要であると考えられる。

これらを踏まえて本研究では夫婦関係の充実

感に着目し，多面的にとらえることとする。

ところで，フランクル（1972/2002）によると，「意味への意志」は，人生から自己を問うことであり，具体的に，ここで・今・その人がどう生きるかで答えるものであり，そのつどの自己の責任性と絶対性を形成するものであり，「意味への意志」が人間の最も根本的な動機である。そして，意味を求める欲求は3つの価値 —「創造価値values in creative work（務めに専心する自己超越によって実現される創造価値）」,「体験価値values by experiencing（何かを体験すること，自然，芸術，人間を愛することによって実現される価値）」,「態度価値values in man's attitude to his existence（自分の可能性が制約されているということが，どうしようもない運命であり，避けられず逃げられない事実であっても，その事実に対してどんな態度をとるかということによって実現される価値）」— を通して実現できるとしている。

これらの概念に基づくと夫婦関係においても，創造価値，体験価値，態度価値の3つの下位概念を想定し，それぞれの価値が夫婦関係においてどのていど実現されているかによって夫婦関係における実存的充実を測定できると考えられる。そこで本研究では，夫婦関係における実存的充実を「夫婦関係において，夫婦関係や夫（妻）としての自分自身および妻（夫）としての配偶者の独自なあり方を受け入れ，こころ豊かに生活していること」と定義する。この「夫婦関係や自分自身および配偶者の独自なあり方」とは，夫婦関係や自分自身および配偶者に与えられた境遇に対して，自分自身および配偶者にとっての意味のあるあり方で応えていくことである。

夫婦関係における実存的充実の3つの下位概念の「創造価値」であるが，生活を共にしている夫婦が日々の何気ないかかわり行動によって夫婦でいることの意味や目的を見出していく内容のものである。次に「体験価値」であるが，配偶者の存在そのものに価値を見出し，自分たちの夫婦関係および自分自身や配偶者の存在そのものを喜びとする愛情にかかわる内容のものである。夫婦関係の質の評価は，かかわり行動だけでは不十分であり，性的な関係を含む愛ある結婚生活における幸福感によって男女の対である夫婦でいることの意味を認識することで夫婦関係における実存的充実が実現できると考えられる。最後に「態度価値」であるが，夫婦関係や自分自身及び配偶者の事実を引き受けようとする態度によって，夫婦関係や妻としての自分自身の存在の意味や目的を見いだしていこうとする内容のものである。中年期ともなれば，“夢や理想を追い求めた時期を過ぎ，様々なしがらみの中で，老若，清濁などの両極を統合していく時期である（氏原・東山・川上，1992）”。避けられない現状や自分たちの夫婦関係や夫あるいは妻としての自分をどのように受け容れ，夫婦関係や夫あるいは妻として，さらには一人の人として自分自身のあり方にどんな意味を見いだしているかという態度が重要であると考えられる。

夫婦関係における実存的充実と関連するものとしては以下のことが考えられる。

Swensen, Trahaug & Trahaug（1985）は，配偶者をかけがえのない相手として愛しているとする夫婦とそうでない夫婦において，違いがあったのは経済的安定であり，夫や妻の年齢・教育程度・健康，子どもの人数においては，違いがなかったとしている。配偶者をかけがえのない相手として愛することは実存的充実の「体験価値」を実現していると考えられることから，経済的に安定していれば夫婦関係における実存的充実は高まると考えられる。

岡本（1994）は“女性は夫婦を含めた家族関係で葛藤を感じやすい”と報告しており，妻のほうが中年期における子どもとの分離体験からくる喪失感や家族関係の葛藤からくる危機を感じやすいと考えられる。さらに，子どもが思春期となり自立し始める時期では，いままで隠れていた夫婦関係の問題が表面化し，夫婦でいることや妻として自分自身の存在に意味や目的を見出せなくなる妻の存在が顕在化するであろうと考えられる。したがって，思春期に満たない子どもを持つ母親群と比較して，思春期以上の子どもを持つ母親群では，実存的充実尺度得点に差がでることが考えられる。

フランクル（1947）は，人間は自分の人生に独自性の感覚を与える意味や目的を求める存在なので，意味や目的を見いだすことに失敗すると「実存的空虚」を体験し，この状態が昂じると，「実存神経症」となることがあると考えた。PIL（Purpose in Life test）研究会（1998）は，人生に意味を見出していることと，YGテストでは抑うつ性や劣等感と負の相関が，MMPIでは抑うつ性と精神衰弱と負の相関がみられることを実証的に報告している。

本研究でとりあげる夫婦関係においても，夫婦でいることの意味や目的，妻としての存在の意味や目的を見いだすことができないでいると，夫婦関係において退屈，虚しさ，倦怠を感じ，この状態が続くと「実存的フラストレーション」になり，昂じると神経症になるなど精神的健康が損なわれることが考えられる。とりわけ夫婦で営む日常生活は慢性的なストレス（daily hassles）となりえる可能性があり，健康状態への影響が大きいことが考えられる。

以上のことから本研究では以下の3つの仮説を検証することを目的とする。

仮説１． 結婚生活における家計のゆとりは，夫婦関係における実存的充実と関連しているであろう。

仮説２． 思春期に満たない子どもがいる母親群と比較して，思春期および思春期を過ぎた子どもがいる母親群においては，実存的充実は低いであろう。

仮説３． 夫婦関係における実存的充実が高ければ精神的健康は高いであろう。

方　　法

1. 調査対象　A県内の大学生・院生の親およびその知り合いの方で，現時点で配偶者がいる40歳以上60歳未満の女性363名。

2. 実施方法　学生および大学院生を通して調査協力者への質問紙の配布を依頼し，調査協力者による個別郵送にて回収した。

3. 調査時期　2007年12月3日から12月13日の期間に質問紙を配布し，12月28日に回収を完了した。

4. 質問紙の構成

① 夫婦関係における実存的充実尺度

本研究のために筆者が作成した夫婦関係における実存的充実の程度を測定する尺度である。作成方法は以下のとおりであった。

創造価値を「夫婦関係におけるかかわり行動によって実現していこうとしている価値」と定義した。そして，松田（2000）の「夫婦する行動」を参考にし，かかわり行動によって実現しようとしている価値（癒し・安心感・リラックス・喜び・楽しさ・連帯感・幸福感）を松田（2000）の項目をもとに追加し，創造価値を問う項目を作成した。

体験価値を，「配偶者と親密にかかわりあい，配偶者を情熱的に愛し，さらに配偶者との愛を維持していこうと自己関与することによって実現される価値」と定義した。配偶者を愛することによって得られる価値としては，ここちよさ・安心感・自信・感動・感謝・幸福感が，さらに，自分自身や配偶者の存在そのものを喜びとし人間存在の神秘に触れることであるとし，Sternberg（1986）のA triangular theory of love尺度項目をもとに追加し，体験価値を問う項目とした。

態度価値を「夫婦関係や夫（妻）としての自分自身および妻（夫）としての配偶者の存在を自覚し受け容れ，夫婦でいることの意味や目的を意識し，その意味や目的を達成しようとする態度によって実現される価値」と定義した。項目については，永田・岡本（2005），宇都宮（1996，1998），氏原ら（1992），織田（2006），Weishaus & Field（1988），Robinson & Blanton（1993），Swensen & Trahaug（1985）の文献から，夫婦関係の満足感が高い夫婦にみられる夫婦関係における自分自身の態度についての記述を収集し，さらに必要と思われた項目を追加作成した。

尺度項目の作成にあたり，３つの価値（創造価値・体験価値・態度価値）の項目の内容が，重複あるいは他の価値に含まれている可能性が考えられたので，すべての項目をKJ法にて分類しなおし，項目をしぼって整理した。なお，KJ法は，臨床心理学を専門とする教員(第２筆者)および臨床心理学を専攻する大学院修了生4名と

第１筆者の計６名により実施した。その後，尺度の予備調査を行ない，尺度項目の洗練を行った。全27項目，５件法である。「よくあてはまる」を5点,「少しあてはまる」を４点,「どちらともいえない」を３点,「あまりあてはまらない」を２点,「まったくあてはまらない」を１点とした。

② 夫婦関係満足尺度

本研究で作成された「夫婦関係における実存的充実尺度」の妥当性の検証のためにKansas Marital Satisfaction(KMS) (Schumm, Paff-Bergen, Hatch, Obiorah, Copeland, Meens, & Bugaighis, 1986) を使用することとした。KMSは，夫婦関係の質を夫婦関係や結婚生活に対する総合的な評価に限定して測定している総合評価型尺度であり，独自な夫婦関係のあり方が測定できると考えられた。３項目，５件法である。

③ うつ病・自殺予防対策のためのスクリーニングツール（K6／K10質問紙）

K10質問紙（平成16年度厚生労働科学研究費補助金，2005）は，気分・不安障害のスクリーニングを目的に開発された尺度で，信頼性・妥当性が確かめられ，9割以上の住民から記入しやすいと評価されている。10項目，５件法である。

④ 基本属性に関するフェイスシート

妻・夫の年齢，妻・夫の就業形態，妻・夫の就業の継続年数，４段階での主観的な家計のゆとり，子どもの年齢および人数について回答を求め，自由記述の欄を設けた。

なお，質問紙にはパーソナリティの開放性尺度も含まれていたが，本論文においては割愛する。

結　　果

配布した質問紙は，363部であった。そのうち，回収されたものは205部（回収率は56.5%），有効回答部数は195部（有効回答率は95.2%）であった。

調査協力者（妻）およびその配偶者（夫）の平均年齢は，調査協力者（妻）49.7歳（SD 4.87），配偶者（夫）52.9歳（SD　5.31）であった。調査協力者（妻）の人数構成は，40歳から44歳までが12.3%，45歳から49歳までが 42.1%，45歳から49歳までが 26.7%，55歳から59歳 までが19.0%であった。夫の年齢の人数構成は，40歳から44歳までが3.1%，45歳から49歳までが 24.1%，45歳から49歳までが36.4%，55歳から59歳までが26.2%，60歳から64歳までが 7.7%，65歳から70歳までが2.6%であった。

なお，以降の統計処理はすべて，SPSS16.0J for windows を使用した。

夫婦関係における実存的充実尺度の構成

1. 下位尺度の構成　主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った結果，因子の解釈可能性から３因子構造が妥当であると判断した。次に，いずれの因子に対しても.40以上の負荷量を示さなかった項目，複数因子に対して高い負荷量を示した項目を除外し，18項目で最終的な因子パターンを得た。因子の解釈について，第1因子は，生活を共にしている夫婦が日々の何気ないかかわり行動によって夫婦でいることの意味を見出している内容の項目に高い正の負荷量を示していた。そこで,「創造価値」因子と命名した。第2因子は，配偶者の存在そのものに価値を見出し，自分たちの夫婦関係および自分自身や配偶者の存在そのものを喜びとした，愛情にかかわる内容の項目に高い正の負荷量を示していた。そこで,「体験価値」因子と命名した。第3因子は，夫婦関係や自分自身及び配偶者の事実を引き受けようとする態度や話し合うことで受け容れていこうとする態度によって，夫婦関係や自分自身の存在の意味や目的を見いだしていこうとする内容の項目に高い正の負荷量を示していた。そこで,「態度価値」因子と命名した(Table 1)。なお，下位尺度得点は項目の数で割った平均値を算出した（Table 2)。

内的整合性を検討するために，下位尺度ごとにCronbachのα係数を算出したところ,「創造価値」でα=.956,「体験価値」でα=.938,「態度価値」でα=.886と十分な値が得られた。また，夫婦関係における実存的充実尺度の下位尺度は，互いに有意な正の相関を示した。

2. 実存的充実尺度の妥当性の検討　夫婦関係における実存的充実尺度の妥当性を検討するために，夫婦関係満足尺度（KMS) との関連性について分析を行った。夫婦関係における実存的充

Table 1　夫婦関係における実存的充実尺度の因子分析結果（Promax回転後の因子パターン,N=195）

項目内容	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
夫と身体を寄せあうことで，心身ともに癒されます。	1.019	.049	-.179
夫に喜びを伝え分かちあうことで，喜びはより大きなものとなります。	.812	-.066	.170
夫と私の関係はとても情熱的です。	.748	.149	-.035
夫とお互いの考えや気持ちを伝えあうことで，心豊かになれます。	.738	-.135	.342
夫と同じ部屋で寝ることで，安心します。	.731	.177	-.111
夫に好意を伝えることで，ほのぼのとした暖かい気持ちになれます。	.654	.144	.145
夫を愛することを通して，人が生きることの不思議さを感じます。	.574	.088	.201
夫といっしょに活動することで，楽しさが増します。	.571	.173	.179
夫と出会えたことはたいへん幸運だったと思います。	.034	.887	-.004
この人を夫に選んでよかったと思います。	.027	.767	.089
夫ほど私のことを幸せにしてくれる人は他にいるとは思えません。	.152	.700	.058
私たちらしい夫婦だと満足しています。	.120	.698	.111
夫との関係はゆるぎないものです。	.226	.460	.247
夫にどんなことがあろうと、妻としての責任をとります。	-.056	.277	.616
夫とその日の出来事を話しあうことで，気持ちが落ち着きます。	.372	-.090	.606
夫婦の絆の有り難さをかみ締めています。	.061	.296	.543
夫の個性を尊重しています。	-.060	.313	.500
ありのままの夫を受け容れています。	.016	.309	.470
寄与率	65.34	4.64	1.95

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	—	.731	.773
Ⅱ		—	.741
Ⅲ			—

Table 2　夫婦関係における実存的充実と夫婦関係満足感との相関と平均，SD

	創造価値	体験価値	態度価値	実存的充実	結婚満足感	平均	SD
創造価値	—	.869**	.802**	.976**	.772**	3.30	1.01
体験価値		—	.837**	.948**	.871**	3.74	0.95
態度価値			—	.884**	.757**	3.76	0.84
実存的充実				—	.831**	62.76	16.32
結婚満足感					—	11.04	2.71

** p<.01

実と夫婦関係満足感との関連は，高い相関（r=.831）が示され（Table 2），夫婦関係に実存的に充実していれば，結婚や夫婦関係に満足していると考えられ，本研究にて作成された充実尺度の妥当性が確かめられた。

夫婦関係における実存的充実と関連する要因

1.実存的充実と調査協力者の属性との関連

①年齢による差の検討　１要因の分散分析の結果，夫婦関係における実存的充実の程度に，夫の年齢による群間で「創造価値」において5%水準で有意な差が認められた（F(5，189)=2.8，p<.05)。TukeyHSD法による多重比較を行ったところ，夫の年齢が45〜49歳の妻たちの群が，夫の年齢が55〜59歳の妻たちの群よりも１%水準で有意に高かった（Table 3)。妻の年齢による群間では，３つの下位尺度において有意な差は認められなかった（Table 4)。

②家計のゆとりによる差の検討　１要因の分散分析の結果，「体験価値」において１%水準（F(3，190)=4.56，p< .01）で，「態度価値」において５%水準（F(3，190)=2.87，p< .05）で群間に有意な差が認められた。TukeyHSD法による多重比較を行ったところ，「どちらかといえばゆとりがある」群が「どちらかといえば苦しい」群よりも「体験価値」において１%水準で，「態度価値」において５%水準で有意に高い値であった（Table 5)。

③子どもによる差の検討　分析の結果，子どもの人数，思春期以下の子どもがいるか否かおよび未成年の子どもがいるか否かで，妻の実存的充実得点の３つの下位尺度の平均値に差は認められなかった（Table 6，Table 7，Table 8)。

2. K10質問紙による精神的健康と調査協力者の属性との関連　本研究における調査協力者のK

10質問紙の合計得点の平均値（SD）は，7.5（6.60）であった。平成16年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）（2005）における一般住民454名におけるK10質問紙の合計得点の平均値（SD）は，男性5.3（6.2），女性4.6（5.5）であった。本研究における調査協力者は，こころの健康科学研究事業（2005）における一般住民と比較すると，精神的健康の程度はやや低いことが認められた。

①年齢による差の検討　1要因の分散分析の結果，妻および夫の年齢においては，年齢によるすべての群間において有意な差は認められなかった（Table 9）。

②夫・妻の就業形態，妻・夫の就業の継続年数による差の検討　妻が，現在専業主婦をしているか否かにおいて，また，妻や夫の就業形態および妻の就業の継続年数によって精神的健康の程度に違いがなかった（Table 10，Table 11）。

③家計のゆとりによる差の検討　1要因の分散分析の結果，「ゆとりがある」群（N=10），「どちらかといえばゆとりがある」群（N=109），「どちらかといえば苦しい」群（N=59），「苦しい」群（N=16）の群間で5％水準（$F(3, 190)=3.01$，$p<.05$）の有意な差が認められた。Tukey HSD法による多重比較を行ったところ，「どちらかといえばゆとりがある」群は，「苦しい」群よりも，5%水準で有意に低い値であることが認められた（Table 12）。

④子どもによる差の検討　分析の結果，子どもの人数，思春期以下の子どもがいるか否かおよび未成年の子どもがいるか否かで，精神的健康の程度に差は認められなかった（Table 13，Table 14，Table 15）。

3. 夫婦関係における実存的充実と精神的健康との関連

夫婦関係における実存的充実の下位尺度とK10による気分・不安障害の程度との相関は，「創造価値」（$r=-.127$，n.s.）において負の相関が認められるものの，有意な相関ではなかった。「体験価値」（$r=-.200$，$p<.01$），および「態度価値」（$r=-.167$，$p<.05$）においては有意に負の相関が認められた。次に，独立変数に「創造価値」「体験価値」「態度価値」を，グループ化変数にカットオフ点（10点）より上位群および下位群を投入し，判別分析を行った。分析の結果，Wilksのラムダは.935（$p<.05$）となり，K10におけるカットオフ点より上位群および下位群が十分離れていることを示していた。正準相関の値は.254とやや低く，実存的充実によってK10の上位群および下位群を識別することが十分ではないものの，60.0%のサンプルが正しく判別された。正準判別関数係数は，「創造価値」（-.940），「体験価値」（1.453），「態度価値」（.290）の値を示し，判別に「体験価値」が大きく貢献していた。そこで，独立変数に「体験価値」のみを投入し，判別分析を行った。その結果は，Wilksのラムダは.948（$p<.01$）と高くなり，K10におけるカットオフ点より上位群および下位群が十分離れており，正準相関の値は.228とやや低くK10の上位群および下位群を識別することが十分ではないものの，65.6%のサンプルが正しく判別された。

Table 3　夫の年齢別群における妻の実存的充実得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	40～44歳 N＝6	45～49歳 N＝47	50～54歳 N＝71	55～59歳 N＝51	60～64歳 N＝15	65～69歳 N＝5	F値 多重比較（Tukey）
創造価値	3.07（1.20）	3.61（0.95）	3.39（0.96）	2.92（1.07）	3.09（0.90）	3.60（0.70）	F(5, 189)=2.80 ＊ 55～59歳<<45～49歳
体験価値	3.52（1.01）	3.98（0.84）	3.78（0.90）	3.47（1.08）	3.74（0.94）	4.06（0.59）	F(5, 189)=1.70 n.s.
態度価値	3.62（0.79）	4.02（0.74）	3.77（0.80）	3.50（1.00）	3.87（0.70）	3.80（0.54）	F(5, 189)=2.04 n.s.

＊（<）p＜.05　＊＊（<<）p<.01

Table 4　妻の年齢別群における妻の実存的充実得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	40～44歳 N＝24	45～49歳 N＝82	50～54歳 N＝52	55～59歳 N＝37	F値
創造価値	3.18（1.05）	3.45（0.97）	3.30（1.05）	3.03（0.98）	F(3, 191)=1.58　n.s.
体験価値	3.66（0.93）	3.82（0.92）	3.82（0.93）	3.50（1.03）	F(3, 191)=1.21　n.s.
態度価値	3.73（0.81）	3.87（0.76）	3.74（0.92）	3.58（0.92）	F(3, 191)=1.00　n.s.

Table 5　家計のゆとり４群における妻の実存的充実得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	A.ゆとりがある N＝10	B.どちらかといえばゆとりがある N＝109	C.どちらかといえば苦しい N＝59	D.苦しい N＝16	F値 多重比較（Tukey）
創造価値	3.68（0.94）	3.37（0.93）	3.07（1.10）	3.35（1.15）	F (3,190)=1.65　n.s.
体験価値	4.08（0.83）	3.88（0.76）	3.38（1.09）	3.92（1.28）	F (3,190)=4.56　** B >> C
態度価値	3.92（0.65）	3.86（0.73）	3.50（0.98）	3.92（1.02）	F (3,190)=2.85　* B > C

＊（<）p＜.05　　＊＊（<<）p<.01

Table 6　子どもの人数別群における妻の実存的充実得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	子どもが1人 N＝24	子どもが2人 N＝106	子どもが3人または4人 N＝60	F値
創造価値	3.18（0.81）	3.29（1.03）	3.36（1.08）	F(2, 187)=.238　n.s.
体験価値	3.78（0.75）	3.70（0.99）	3.81（0.95）	F(2, 187)=.352　n.s.
態度価値	3.76（0.71）	3.73（0.88）	3.78（0.85）	F(2, 187)=.063　n.s.

Table 7　思春期の子が「いる」あるいは「いない」の２群における妻の実存的充実得点の平均値（SD）およびt検定の結果

	思春期以下の子がいる N＝67	思春期以下の子がいない（子はすべて思春期を過ぎている） N＝122	t値
創造価値	3.35（1.06）	3.25（0.99）	t =.631 n.s.
体験価値	3.78（1.00）	3.71（0.91）	t =.463　n.s.
態度価値	3.83（0.79）	3.70（0.88）	t =1.05　n.s.

Table 8　未成年の子が「いる」あるいは「いない」の２群における妻の実存的充実得点の平均値（SD）およびt検定の結果

	未成年の子がいる N＝40	未成年の子がいない（子はすべて成人している） N＝149	t値
創造価値	3.24（0.99）	3.61（1.01）	t =−.319　n.s.
体験価値	3.61（1.01）	3.78（0.93）	t =−.963　n.s.
態度価値	3.79（0.84）	3.73（0.85）	t =.325　n.s.

Table 9　妻および夫の年齢別群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	F値
	N＝24	N＝82	N＝52	N＝37			
妻	7.29(5.57)	8.11(6.58)	7.90(7.50)	5.95(5.90)			F(3, 191)=.985　n.s.
	N＝6	N＝47	N＝71	N＝51	N＝15	N＝5	
夫	8.67(7.03)	9.17(7.10)	7.06(5.96)	7.80(7.37)	4.27(4.44)	5.00(4.30)	F(5, 189)=1.608 n.s.

Table 10　妻および夫の就業形態別群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	A. 経営者・自営業者・自由業者	B. 常時雇用されている一般従業員（公務員を含む）	C. パート・アルバイト・派遣・内職	F値
	N＝32	N＝61	N＝92	
妻	7.62(6.95)	6.80(6.09)	8.02(6.92)	F(2, 181)=.614　n.s.
	N＝48	N＝134	N＝6	
夫	8.38(7.57)	7.26(6.24)	10.33(7.29)	F(2, 185)=1.009　n.s.

Table 11　妻の就業年数別群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	勤続年数 5年未満	勤続年数 5年以上10年未満	勤続年数 10年以上20年未満	勤続年数 20年以上	F値
	N＝27	N＝50	N＝43	N＝65	
妻	6.93(7.49)	7.56(6.01)	7.63(6.67)	7.69(6.77)	F(3, 181)=0.09　n.s.

Table 12　家計のゆとり4群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	A. ゆとりがある	B.どちらかといえばゆとりがある	C.どちらかといえば苦しい	D.苦しい	F値 多重比較（Tukey）
	N＝10	N＝109	N＝59	N＝16	
精神的健康	7.30（6.33）	6.78（6.01）	7.71（5.69）	12.00（11.00）	F (3,190)=3.01　* B ＜ D

*(<) p <.05

Table 13　子どもの人数別群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）および分散分析の結果

	子どもが1人	子どもが2人	子どもが3人または4人	F値
	N＝24	N＝106	N＝60	
精神的健康	7.96(5.14)	7.68(6.83)	7.37(6.82)	F(2, 187)=.079　n.s.

Table 14　思春期の子が「いる 」あるいは「いない」の 2 群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）およびt検定の結果

	思春期以下の子がいる	思春期以下の子がいない（子はすべて思春期を過ぎている）	t値
	N＝67	N＝122	
精神的健康	7.87(5.96)	7.50(6.99)	t =.131 n.s.

Table 15　未成年の子が「いる 」あるいは「いない」の2群における妻のK10質問紙得点の平均値（SD）およびt検定の結果

	未成年の子がいる	未成年の子がいない（子はすべて成人している）	t値
	N＝40	N＝149	
精神的健康	7.98(5.13)	7.54(6.99)	t =.137　n.s.

考　　察

調査協力者の基本属性

調査協力者の属性を，日本国民10000人（回収率63%）を対象とした家族についての全国調査（全国家族調査委員会，2005）のサンプルと比較したところ，本研究における調査協力者のサンプルは，家族についての全国調査より①「現在，専業主婦をしている」妻がやや少数である（本研究における調査協力者においては「現在，専業主婦をしている」群の人数は全体の20%，家族についての全国調査においては「現在，専業主婦をしている」群の人数は全体の29.5%であった）ことと，②「家計にゆとりがある」とする者が多く含まれていた（本研究の調査協力者においては「かなりゆとりがある」あるいは「どちらかといえばゆとりがある」群の人数は全体の61.0%，家族についての全国調査においては「かなりゆとりがある」あるいは「どちらかといえばゆとりがある」郡の人数は全体の40.4%であった）。この違いは，本研究における調査協力者は，子どもに高等教育を受けさせようという意志のある家庭の母親であることから，教育費などの出費のため仕事をしているか，あるいは経済的ゆとりのある家庭の母親が多く含まれている可能性が考えられる。

夫婦関係における実存的充実尺度の作成について

本研究では，家族の中核をなしている夫婦のあり方が，個人や社会の病理現象に大きく影響を及ぼしているのではないかという視点に立ち，夫婦関係のあり方や質に関する調査を試みた。これまでの研究と比べ，本研究では，夫婦関係を実存的充実という視点からより多面的に３つの側面で夫婦関係をとらえることができた。

人は中年期に入り，自分の中に若さと老い，魅力と嫌悪，長所と短所，理想と失望，獲得と喪失など，両極端な面を併せ持つようになり，まさに人生の過渡期であり，それらの統合が重要になってくる。そのような中年期にとって，夫婦関係もまた過渡期であると考える。夫および妻にとっても，それまで仕事や子育てにエネルギーを注いできた生き方から，しだいに夫婦関係の中で自分たちのあり方や，さらには心の内面へと視点が移行していく転換期でもあろう。そのような時期にあっては，夫婦関係においても多面的な視点に立ってとらえることが必要であるといえる。

本研究では，その点を踏まえ，夫婦関係を夫婦としての日々の暮らしの中で，自分たちらしい独自な夫婦あるいは妻（夫）としていかに充実した夫婦関係を営んでいるかという視点で評価することとした。その結果，夫婦関係における実存的充実は，「創造価値（夫婦としてのかかわり行動の側面）」，「体験価値（愛情を基盤とする感情の側面）」，「態度価値（自分たちの夫婦関係や配偶者および自分自身を受け容れようとする態度）」の理論的に想定した３つの側面を測定する尺度をつくりあげることができた。これらと夫婦関係満足感との相関を検討したところ，実存的充実が実現できているほど夫婦関係に満足していることが確認された。

夫婦関係における実存的充実尺度と調査協力者の属性との関連

夫婦関係において充実している程度に違いがみられたのは，「夫の年齢」「専業主婦」「家計のゆとり」の３つであった。

「夫の年齢」との関連について，55〜59歳の夫を配偶者にもつ妻たちは，45〜49歳の夫を配偶者にもつ妻たちより，「創造価値」すなわち日々の夫婦関係におけるかかわり行動における実存的充実が低いことが認められた。55〜59歳の年齢とは，下山（2002）が述べる“中年期の激しい変化”の時期であり，氏原ら（1992）が述べる“若さの喪失，能力や体力の喪失，健康の喪失，近づく死による寿命の喪失など，喪失体験のはじまる時期”である。この年齢の夫の多くは，定年間近であり数年先に社会的な地位や立場から退くことになるだろうという社会的喪失感に脅かされながら仕事に励むという状況で，精神的に不安定であることが考えられる。そのことが夫婦関係に影響を与えている可能性が考えられる。また，岡本（1994）は，“50歳代後半になると，「自分はもう若くない」という意識とともに，限界感などが一気に増加している”と述べている。「創造価値」が，活動したり創造したり夫や妻としての具体的活動によって実現さ

れる価値であるということから，肉体的に限界を感じている55〜59歳の夫にとっては，具体的活動に対する意欲が低下し結果として実存的充実が低くなる可能性が考えられる。そういう夫とかかわり行動をする妻も，その影響を受け実存的充実が低くなるのであろう。そういう時期にあって，夫婦関係において「創造価値」にとらわれることなく，「体験価値」および「態度価値」において実存的充実を実現することで，危機を乗り越えていく知恵が必要であるかもしれない。

妻自身の年齢によっての精神的健康には違いはみられなかった。経済的安定が妻の実存的充実に関連していたことと考え合わせると，夫が定年間近であることが妻に経済的不安感を抱かせ，そのことが実存的充実の低下という結果をもたらした可能性も考えられる。そうであるとするならば，妻は現実的な経済的苦しさではなく，将来的な経済的な苦しさの予測のみで実存的充実が低くなったことになる。しかし，実際に「家計が苦しい」と回答した妻たちは，そうでない妻たちより精神的健康が低かったことから，将来的な不安感のみでなく現実的に家計が苦しくなると，精神的健康を損なう妻が出現しているといえる。経済的安定が夫婦関係において，さらには個人の精神的健康にいかに重要であるかが明らかになった。

「専業主婦」との関連について，「現在，専業主婦をしている」妻たちが，「現在，仕事をしている」妻たちより，「体験価値」すなわち配偶者を愛することによる実存的充実が高いことが認められた。「現在，専業主婦をしている」妻たちと「現在，仕事をしている」妻たちとの違いとして，「妻が夫に経済的に依存している」，「家庭の中で役割を分業している度合いが高い」という点が考えられる。それらのことがお互いをかけがえのない相手としてとらえる傾向が高くなり，「体験価値」を高めることにつながったことが考えられる。

「家計のゆとり」について，**仮説 1** は，「体験価値」および「態度価値」において，「どちらかといえばゆとりがある」妻たちは「どちらかといえば苦しい」妻たちより実存的充実が高いことが認められ，支持された。Swensen, Trahaug & Trahaug（1985）は，配偶者をかけがえのない相手として愛しているとする夫婦とそうでない夫婦と比較して違いがあったのは，経済的安定のみであり，夫や妻の年齢・教育程度・健康，子どもの人数では違いがなかったとしている。配偶者をかけがえのない相手として愛することは，実存的充実の「体験価値」を実現しているとも考えられることから，家計のゆとりと「体験価値」との関連は，Swensen, Trahaug & Trahaug（1985）の研究を裏付ける結果となった。さらに，Weishaus & Field（1988）による縦断研究では，結婚が長期継続した夫婦とそうではない夫婦と比較して，違いがあったのは経済的安定であるという結果が出されていた。結婚は，夫婦が協力して社会生活を営むことであり，生活するための経済的安定は不可欠であろう。まず，経済的に安定した生活があり，その上で夫婦関係の質である実存的充実が高まっていくことが考えられる。

仮説 2 の実存的充実と「子どもの年齢」との関連性は明らかにならなかった。すなわち，思春期および成人期の子どもをもつ親とそうでない親との比較検討では，夫婦関係における実存的充実に子どもに関する事柄は影響を与えないようである。子育ては夫婦にとって共に取り組む一つの課題であり重要な事柄であったとしても，夫婦関係における実存的充実はあくまでも夫婦関係の中で育まれるものとしての3つの価値（「創造価値」「体験価値」「態度価値」）によって実現されるものであると考えられよう。

仮説 3 である夫婦関係における実存的充実が精神的健康に及ぼす影響についての検討においては，精神的健康に対する判別分析で，3つの価値の単独およびすべての組み合わせを説明変数とする中で，「創造価値」および「態度価値」を除外した「体験価値」のみによる精神的健康に対する判別的中率が，最大値の65.6%となった。そのことは，精神的健康は夫婦関係における「体験価値」に大きく影響されていることを示唆している。「体験価値」とは，「配偶者を愛し，自分たちの夫婦関係および自分自身や配偶者の存在そのものを喜びとしている」ことであり，

感情にかかわる側面であることから，感情が精神的健康に及ぼす影響が大きいことが示唆された。いいかえると，夫婦関係において「体験価値」によって体験される，愛情を基盤としたポジティブな感情が精神的健康に影響を与えているといえよう。そういう意味で，夫婦関係においても愛情を基盤としたポジティブな感情が極めて重要であると考えられる。

自殺対策支援センター・ライフリンク（2008）によって発表された「自殺実態白書2008」によると，“自殺に追い込まれるまでは，うつ病，家庭不和，負債など平均して４つの要因が連鎖している”としている。本研究において，経済的安定が夫婦関係における実存的充実と精神的健康に関連し，さらに「体験価値」における感情が精神的健康に大きく影響を及ぼしていることから，本研究は「自殺実態白書2008」と類似した結果を示すこととなったと考えられる。経済的安定に支えられた夫婦関係のあり方や質は，それらが良好にあることで，夫や妻の精神的健康に良い影響を与えていくと考えられよう。

以上の考察だが，最初に全国調査との比較をしたように本調査協力者のサンプリングには偏りがあると考えられ，一般化がどこまでできるかには疑問が残る点がある。しかし，それでも数少ない日本での研究という意味で有益な結果と示唆が得られたといえよう。

加えて本研究では，夫婦関係を，具体的なかかわり行動（「創造価値」），愛情を基盤としたポジティブな感情（「体験価値」），夫婦関係や自分自身および配偶者を受け入れといこうとする態度（「態度価値」）の３つの側面から検討した。このことは，これまでの研究における一面的な捉え方ではなく，多側面的な視点でとらえたことに意義があると思われる。本研究で作成された尺度は，今後の夫婦関係の研究において活用される価値があるであろう。

今回は，中年期の女性を対象にした調査研究であったが，自殺の多さでは中年期の男性が群を抜いている。中年期の男性にあっては，家庭の経済的安定のため，あるいは企業戦士として，ときには家庭を顧みる暇もないほどに働いてきた夫たちも多いだろう。その夫たちが定年間近になり，家庭に居場所がないという状況も起きている（関谷，1989）。「自殺実態白書2008」（自殺対策支援センター・ライフリンク，2008）による自殺に追い込まれる要因として，家庭不和があげられていることと考え合わせ，中年期の夫たちにとっても，夫婦関係のあり方や質は非常に重要であるといえる。今回の研究で取り上げられなかった中年期の男性の側から見た夫婦関係や精神的健康についての研究がなされる必要が今後あるだろう。

引用文献

Adams,J.M.&Jones,W.H.　1997　The conceptualization of marital commitment;

An integartive analysis. Journal of Personality and Social Psychology, 72, 1177-1196.

エリクソン　E.H.　小此木啓吾（訳）　1973　自我同一性　誠信書房（Erikson,E.H. 1959 Identity and the Life Cycle.International Universities Press）

フランクル V.E. 1947　山田邦夫•松田美佳（訳）　1993　それでも人生にイエスと言う　春秋社.（Frankl,V.E. 1947 ...Trotzdem Ja zum Leben sagen,）

フランクル V.E. 1972　山田邦夫（訳）2002　意味への意思　春秋社.（Frankl,V.E. 1972　Der Wille zum Sinn）

平成16年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）　2005　成人期における自殺予防対策のあり方に関する精神保健的研究　「自殺の実態に基づく予防対策の推進に関する研究」分担研究報告書.

一丸藤太郎　1990　男性の中年期危機に関する臨床心理学的考察　広島大学教育学部紀要　第一部　39，223－230.

伊藤裕子　2000　ジェンダーの発達心理学　ミネルヴァ書房.

Johnson,M.P. 1991 Commitment to personal relationships. In W.H.Jones & D. Perlman(Eds), Advances in personal. relationships: A research annual (Vol.3, pp.117-143). London: Jessica Kingsley.

柏木恵子・平山順子　2003　非結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性　心理学研究　74（2），122－130.

厚生労働省　1998　厚生白書（平成10年版）.

厚生労働省　2006　離婚に関する統計.

松田智子　2000「夫婦する」行動の3つの次元　社会学部論集　仏教大学学会　33，61－72.
永田彰子・岡本祐子　2005　重要な他者との関係を通して構築される関係性発達の検討　教育心理学研究　53,331-343.
岡堂哲雄　2000　家族カウンセリング　金子書房　43－66.
織田尚生　2006　午後3時のこころの変遷と危機　臨床心理学　中年期のこころ模様　Vol.6　No.3，305－309.
岡本祐子　1985　中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究　33，295－306.
岡本祐子　1994　成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究　風間書房.
PIL研究会　1998　PILテスト‐日本版マニュアル‐（株）システムパブリカ.
Robinson, L. C., & Blanton,P.W. 1993 Marital strengths in enduring marriages. Family Relations, 42,38-45.
佐藤悦子　1999「夫婦療法」金剛出版　216－217.
Schumm, W. R., Paff-Bergen, L. A., Hatch, R. C., Obiorah, F. C., Copeland, J. M., Meens, L. D., & Bugaighis, M. A. 1986 Concurrent and discriminant validity kf the Kansas Marital Satisfaction Scale. Journal of marriage and the Family 48, 381-387.
関谷透　1989「お父さんは，もう帰れない」－帰宅恐怖症候群－　プラネット出版.
下山晴彦　2002　教育心理学Ⅱ－発達と臨床援助の心理学－　東京大学出版会.
Sternberg, R. J.　1986　A triangular theory of love. Psychological Review, 93, 119-135.
Swensen, C.H.,& Trahaug,G. 1985 Commitment and the long-term marriage relationships. Journal of Marriage and the Family,47,939-945.
菅原ますみ，琢磨紀子　1997　夫婦間の親密性の評価　－自記入式夫婦関係尺度について－精神科診断学　8，155－166.
氏原寛・東山紘久・川上範夫　1992　中年期のこころ―その心理的危機を考える―培風館.
宇都宮博　1996　人生後期における夫婦の関係性ステイタスに関する研究　広島大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊).
宇都宮博　1998　高齢期における配偶者との関係性と夫婦人生の移行過程の検討　広島大学教育学部紀要第二部47号　163-172.
Weishaus, S., & Field, D. 1988 A half century of marriage:Continuity or change? Journal of Marriage and the Family 50,763-774.
全国家族調査委員会　2005　家族についての全国調査（NFRJ03）第一次報告　日本家族社会学会
自殺対策支援センター・ライフリンク　2008「自殺実態白書　2008」.

1）岐阜大学大学院教育学研究科平成20年度修了生